

本学教員執筆書籍の紹介

塩野 寛・清水恵子 著

生命倫理への招待改訂3版

南山堂 定価1,995円(税込)

清水 恵子

医学の進歩に伴い、「ヒトの死」及び「ヒトの生」に対して、医学が積極的に介入するようになって久しい。誕生に関わる問題だけに限ってみても、「人工妊娠中絶」、「胎児診断による生死の選別」、「男女の生み分け」、「減数手術」は、医学がヒト誕生前にその「生を絶つこと」に関与する問題である。また、「人工授精」、「体外受精」、「顕微授精」等は、「ヒトの生」に対する積極的な医学的介入である。

医学が、生命誕生や生を絶つことに手が届くようになると、単に医学だけでは解決できない多くの問題が浮き彫りにされてくる。例えば、「ヒトはいつから人であるのか」、「人格を持った人とは何か」、「人格を失った人とは何か」、「生命の質に差をつけて良いのか」、「ヒトが活着しているとは何か」、「ヒトの死とは何か」、「臓器移植時の脳死と臓器移植をしない場合の脳死で、死亡時刻の違いは現在のままで良いのか」、「意識のない植物状態の患者は人格を持ったヒトなのか」、「自分の意志で死を選びたいから、延命治療はいらない」という問題など……。今まで論じられてこなかった、死の定義、尊厳死、安楽死といった「死」に関わる問題が、山積となって噴き出してきている。昔は寿命を全うする治療が絶対視されていた。しかし、医学が進歩した現在、「延命治療の是非」という形で、「死期の選択」が論じられるようになってきた。

加えて、医療に伴う諸事情に関して、患者の自己決定権と医師の裁量権という問題が浮き彫りにされるようになった。以前、日本人の医師と患者の関係は、いわゆる「あ・うん」の呼吸であり、医師は専門家として一番良い方法を決めて提供し、患者も「全て、お任せします」……といった付き合いの時代が長かった。「ヒポクラテスの誓い」にも認められる様に、古代よりそういった患者-医師関係が、習わしでもあった。

しかし、近年、患者の自己決定権の認知度向上もあって、患者からインフォームド・コンセントを得た上で行われる医療が、広く行き渡るようになってきた。この広がりには、患者の権利意識向上と平行して生じた、インフォームド・コンセントを争点とした民事裁判による判例等の蓄積によって、法理としても後押しされている。

これらの気風を受けて、医師・歯科医師、薬剤師、看護師などの医療関係者に加えて、宗教学、哲学、倫理、法学、心理学、医療経済学、分子生物学の各分野の人々からなる生命倫理学会が設立されている。また、最近の医学部や看護学部の授業の中には、生命倫理、医療倫理あるいはインフォームド・コンセント論として登場している。

生命倫理・医療倫理は、時代の流れと共に変化していくものである。人々の意識や科学技術の進歩は、常に変化しており、恒久的なものではないことは自明の理である。

この本では生命倫理の流れを「はじめ」として、①生命誕生と医学の介入（人工授精、体外受精、顕微授精、再生医療とクローン人間、生殖技術と新しい倫理問題、生殖技術の商品化、日本の現状）、②生を絶つことへの医学の介入（胎児とヒト、人工妊娠中絶、選別出産、減数手術）、③死への医学の介入（死とは、脳死の生命倫理、人殺しの死、安楽死、尊厳死、医療と宗教・エホバの証人）、④生と死のケア（ターミナル・ケア、ホスピス、ターミナル・ケアとQOL、看護からみた生と死のケア、死の臨床）、⑤インフォームド・コンセント（パターナリズム、医師の裁量権、病名告知、末期医療と告知、看護とインフォームド・コンセント、法律からみたインフォームド・コンセント、インフォームド・コンセントの裁判例、新薬の開

発と倫理問題、遺伝子診断の応用と人権)、⑥医療と法と倫理(医療行為と倫理、医の倫理と法、看護と倫理、看護と法、看護業務と医療事故、医療事故の防止)について記述した。

2001年1月に初版を出版して、今まで改訂3版に達している。当初、この分野での初学者向けの書籍が少なかったこともあり、2006年からは駿台文庫の医療系

学部受験対策小論文用参考書に一部記載され、受験生へ推薦されている。また、医学部、看護学部はもとより、文学部、法学部、理工学部、獣医学部での一般教育用教科書として、広く採用されていると出版元から聞いている。

多くの人に本書を読んで頂き、ご意見、ご叱責を頂けたら著者らの望外の喜びである。